

九郎太郎殿御返事

建治二年九月一五日 五五歳

い糸の芋一駄送り給び候。こんろん山崑 嵩と申す山には玉のみ有りて石なし。石ともしければ玉をもて石をかふ。ほうれいひん彭 蓋 浜と申す浦には木草なし。いをもって薪魚 たきぎをかふ。鼻に病ある者はせんだん香梅 檀、用にあらず。眼なき者は明らかなる鏡なにかせん。

此の身延の沢と申す処は甲斐国波木井の郷の内の深山なり。西には七面なないた 崩のがれと申すたけあり。東は天子のたけ、南は鷹取たかとりのたけ、北は身延のたけ、四山の中に深き谷あり、はこのそこのごとし。峰にははかう巴 峽の猿こえの音かまびすし。谷にはたいか箱 底いの石多し。

然れども、するが駿 河 芋のいものやうに候石は一つも候はず。いものめづらしき事芋、くらき夜灯のともしびにもすぎ、かはける時の水湯にもすぎて候ひき。いかにめづらしからずとはあそばされて候ぞ。されば其れには多く候か。あらこ恋ひし、あらこひし。法華経・釈迦仏にゆづりまゐらせ候ひぬ。定んで仏は御志をおさめ給ふなれば御悦び候らん。靈山浄土へまゐらせ給ひたらん時御尋ねあるべし。恐々謹言。

建治 九月十五日

日 蓮 花 押

九郎太郎殿御返事